

むろう地すべり見楽館リニューアル基本計画の策定について

県土マネジメント部 砂防・災害対策課 石橋 宏章

1. はじめに

奈良県宇陀市室生に位置する「むろう地すべり見楽館」(以下、見楽館)は、地すべり災害の脅威や地すべり対策事業の必要性、地すべり災害発生時の避難方法について広く周知することを目的として、奈良県が平成9年度に整備を開始し、平成13年に完成した(図1)。見楽館は完成以降、全国的に珍しい地すべりに特化した学習施設として防災教育および防災啓発に活用されてきた。

また、日常的な設備点検や運営、見楽館周辺の草刈りや清掃活動などの環境保全活動は地元の室生自治会が主体となって行っており、令和7年には、こうした継続的な管理運営の功績が評価され、同自治会が土砂災害防止功労者表彰を受賞している(図2)。

このように、見楽館は地域と連携しながら、防災教育・啓発に大きく貢献している貴重な施設である。しかし、施設の完成から約30年が経過し、施設の老朽化や展示内容の更新不足などの課題も顕在化している。また、当該施設の周辺では日本遺産にも認定された室生寺をはじめ、多くの観光地が存在しており、特に、「室生山上公園芸術の森」(以下、山上公園)では、近年観光客の増加が見られている。山上公園は、地すべり対策事業後の用地や対策施設を活用して旧室生村(現・宇陀市)が、地すべり対策とアートの融合を柱とした面積約7.8haにわたる野外展示型の公園整備を行っている。しかし、アート作品の展示施設としての色合いが強く、地すべり災害に関する学習や啓発の機能は十分とはいえない。当該地域への観光需要が高まるなか、見楽館をリニューアルし、他施設を訪れる観光客が立ち寄りやすいような施設とすることで、より広い層への防災教育・啓発を行うと共に、当該地域の観光振興への寄与が可能だと考える。

こうした状況を受けて、奈良県では、国土交通省が推進する「ダイナミック SABO プロジェクト」を参考にして、「奈良県ダイナミック SABO(地すべり)プロジェクト」として、見楽館のリニューアルに向けた検討を開始した。

そこで今回は、見楽館の整備背景と現在の施設概要を振り返るとともに、プロジェクトの課題とリニューアルの方向性について報告する。



図1. 見楽館の外観



図2. 土砂災害防止功労者
表彰受賞の様子

2. 見楽館が設置された経緯と背景

見楽館が位置する宇陀市室生は、日本最大級の 144.89ha の地すべり防止区域であり、昭和 34 年の伊勢湾台風の豪雨に伴い地すべりが活性化し、山津波も発生するなど、住宅や道路に未曾有の被害が生じた。当初は地表水の排除を目的とした水路工の整備が進められたが、昭和 46 年の台風 29 号の影響で、住宅倒壊や浸水被害を受けたため、昭和 49 年に地すべり防止区域に指定されている。その後も昭和 57 年の台風 10 号、平成 2 年の台風 19 号・28 号、平成 7 年の梅雨前線による豪雨、平成 9 年の台風 9 号などの影響により、再び地すべり滑動が見られたため、平成 7 年度より災害関連緊急地すべり対策事業を実施し、集水井工、横ボーリング工、水路工などの地下水排除工に加え、鋼管杭やアンカー工といった抑止工の整備を行った。その結果、平成 14 年には地すべり滑動はおおむね沈静化するに至っている。このように当該地域が大規模な地すべり被害を受けた経験や対策工事の取り組みを、地域の人々や子供たちにもわかりやすく伝えていく必要があると考えられ、平成 13 年度に見楽館は完成した。



図 3. 地すべりによる
家屋等への被害 (H7)

3. 展示施設の説明と課題について

(1) 展示施設の説明

見楽館は屋外および屋内の二つのエリアで構成されている。全体の構成を図 4 に示す。



図 4. 見楽館の概要

施設内ではまず、地すべりの基本的な知識や、室生における地すべりの歴史や対策事業、地すべりの前兆について、映像で紹介する「地すべり教室」が設けられている。さらに、地すべりの前兆や発生時の揺れを、映像と振動する床を通じて体験できる「体験シアター」では、身体感覚を通じて災害の恐ろしさを実感できる設備となっ

ている。また、地下の集水井やボーリング孔を再現したジオラマ模型も展示されており、音声ガイドと連動して光や動きが加えられることで、地下水の流れや対策工法の仕組み等について、視覚的・聴覚的に理解できるよう工夫されている。

屋外には、実際の地すべり対策で使用されている2種類の「鋼管杭模型」（SM570 材 φ508.0mm、SM490 材 φ457.2mm）が実物大で展示されており、対策工の規模感や構造を確認することができる。また、原寸大に近い「集水井の体験模型」では、来館者が内部に入ってその構造を観察できるようになっている。加えて、実際に対策工として整備された「集水井のライトアップ施設」が展示されており、ボーリング孔から湧き出る水の様子や内部の構造が照明によって観測することができる。

（2）展示施設の課題について

展示施設における課題として、屋内外に設置された展示施設は、施設完成当初から大きな更新が行われておらず、映像や展示内容も当時のままである。そのため、特に子どもにとっては表現が古く感じられ、興味を引きにくくなっている。また、本施設がなぜこの場所に整備されたのかを説明する導入的な展示が存在せず、利用者が背景や目的を理解しにくい構成となっている。屋外展示に関しても、各展示間の関連性が乏しく、全体としての一体感や体系的な理解を促す構成には至っていない。加えて、防災教育の観点からは、ハザードマップの設置など、地すべり災害から身を守るための情報提供が不足しており、その充実が求められるのではないかと考える。

4. 奈良県ダイナミック SABO（地すべり）プロジェクトについて

（1）プロジェクトに向けた検討

プロジェクトを検討していく上で、多角的な視点を取り入れるため、当課の若手職員、防災教育担当職員、そして砂防事業に精通したベテラン職員により、施設の課題整理と改善案について意見交換を行った。また、情報収集により地すべりに関連する県管理の施設を調べ、事例収集を実施した。これらの成果について、本稿では特に意見があった以下の課題と改善案について取り上げる。

① 学習設備（展示内容）の改良について

施設の展示（図5）の事例収集を行う中で、意見交換の際に改善案として、実際に地すべり災害から身を守るための情報や地域の地形状況を確認するため、施設の床面や展示資料に、ハザードマップや航空写真を設置する案が提案された。

また、子どもを対象とした防災教育としての利用を想定した場合、現在の展示だと、説明看板の配置位置が高く、文字が小さくふり仮名が見つらい点が指摘されたため、説明看板の配置を低く設定し、子どもが見やすい位置に調整することや、文字サイズの拡大、イラストを多くするなど、子どもでも理解しやすく、親しみやすいデザインへの改良案が提案された。



栗駒高原ビジターセンター（宮城県）



栗駒高原ビジターセンター（宮城県）



亀の瀬地すべり歴史資料室（大阪府）



きつづ光科学館ふおとん（京都府）

図 5. 展示施設例

② 室生自治会と協力した今後の管理運営方法について

見楽館の日常的な管理運営については、室生自治会が主体となっていて行っているが、管理の複雑な機器等を導入した場合、故障時の対応や使用方法に関して、自治会での対応が困難となり、運用の継続が難しくなる可能性がある。そのため、①で提案した展示物の改良により、内容の充実を図ることは、管理運営の負担軽減にも繋がるのではないかと考えられる。

5. おわりに

むろう地すべり見楽館は、これまで約 30 年間にわたり、地すべり災害に関する防災教育および啓発の施設として重要な役割を果たしてきた。一方で、施設の老朽化や展示内容の更新不足などの課題も顕在化している。これらの課題を踏まえ、奈良県は、「奈良県ダイナミック SABO（地すべり）プロジェクト」として、室生自治会や宇陀市職員、防災教育の利用者である教員や生徒へのヒアリングなどを加味したうえで、室生の歴史的・文化的背景を踏まえ、さらに見楽館のストック効果を最大限に発揮できるような見楽館のリニューアルを行いたいと考えている。これにより、防災教育・啓発の強化とともに、当該地域の観光振興にも貢献する施設として、効果を発揮していくことを期待している。実際に見楽館がリニューアルオープンを迎えるのは、数年先となる見込みであるが、今後も検討を重ね、本施設が地域の防災力と活力を支える拠点となるよう引き続き真摯に取り組んでいきたい。